

いけのしりり あま ぎょうじ いけのしりちよう

## 池之尻の雨ごい行事（池之尻町）

昔、池之尻は、「月夜にでも稲がやけるところだから、むすめはよめにやるな」とうわさされるぐらい、日やけの多い土地柄だった。大干ばつ（大日でり）がやってくるとお百姓たちは神仏にお願いして降雨を頼むよりほかなかった。

まず、村人全員が氏神さんに集まって、二夜三日のおこもりをした。全戸からお米を集めてたき出しをした。大釜で油揚げとイリコを入れてしようゆで味をとるイリコ飯をたいた。これで大きなむすび「モツソウ」をつくってみんなに配った。平素麦飯ばかり食べている百姓たちにとって、特別なご馳走で一人で五つから七つも食べた者もいた。雨ごい行事は、神官を中心に祈とうを行い、全員で、大祓（わざわいをなくす）の祝詞を一心に繰り返し唱えるのである。

それでも雨の降らないときは、まず家々からたき木や麦わらを持ちより、仁池の堤の上や母神山の頂上にある竜王祠のよこで、天をこがすばかりの大火をたいて雨が降るよう天に祈った。そのほか、粟井奥谷の竜王祠に代表者を参拝させた。奥山深く入ったこの地には、『おなぎさん』とよばれる小さな淵（川の水が深くよどんでいるところ）がある。淵にお神酒を注ぎ雨を祈り、もし、ウナギが姿を見せると、ご利益（神さまのめぐみ）があり、雨が降るといわれていた。

ある年には、上高野の「じん山」に祭つてある竜王さんのご神体を、人に知られないように盗み出してくるのである。ご神体は、重さが二十キログラムもある丸い石で、力の強い若者が白木綿でご神体を巻き、背中に負うて交替で神社まで運んでくる。ご神体は、お酒が好きなので、大きなはんぼ（浅くて広いだ円形のたらいにした入れ物）の中の酒を三升程つきこんで、そこへご神体を入れてお祭りする。翌日、はんぼの酒はほとんど吸いとられている。ご神体は、二、三日後にお礼を持って、お返しに行くのである。

また年によつては、財田の入桶地区に伝わる雨ごい踊りを迎えて、心光院の広場で雨ごい踊りを奉納（神さまに踊りなどをお見せすること）してもらつたり、時には、伊予三島の山奥にある黒蔵の竜神さんのお水ももらい、青年たちの駅伝マラソンで運んで来たりする。この水を運ぶ者は、金物にふれてはご利益がないとのことで、乗り物も使わずどんなに苦しくとも走り通さなければならぬのである。それは、もし途中で休むと、その地点に雨が降るといわれているからである。竜神渚で酒びんにお水をいただいて、三十五キロメートルの道を駅伝で走り継ぎ無事村に帰り着くと、さつそく仁池ほか五つの池にお水を注いで、雨の降るようお祈りするのである。

今から考えると、迷信としか思われないが、当時としては、他に頼る方法のなかつた農民が神仏に祈るひたむきな心のあらわれだったのだろう。

（「観音寺市誌」より）